

王さまと靴屋くつや

新美にいみ

南吉なんきち

ある日、王さまはこじきのようなようすをして、ひとりで町へやってゆきました。

町には小さな靴屋がいくつかあって、おじいさんがせつせと靴をつくっておりました。

王さまは靴屋の店にはいって、「これこれ、じいや、そのほうはなんとという名まえか。」

とたずねました。

靴屋のおじいさんは、そのかたが王さまであるとは知りませんでしたので、

「ひとにものをきくなら、もっとていねいにいうものだよ。」

と、つつけんどんにいって、とんとんと仕事をしていました。

「これ、名まえはなんと申すぞ。」
とまた王さまはたずねました。

「ひとにくちをきくには、もっとていねいにいうものだというのに。」

とじいさんはまた、ぶつきらぼうにいて、仕事をしつづけました。

王さまは、なるほどじぶんがまちがっていた、と思って、こんどはやさしく、

「おまえの名まえを覚えておくれ。」
とたのみました。

「わしの名まえは、マガステルだ。」

とじいさんは、やっと名まえを教えました。

そこで王さまは、

「マジステルのじいさん、ないしょのはなしだが、おまえはこの国の王さまはばかやろうだとおもわないか。」

とたずねました。

「おもわないよ。」

とマジステルじいさんはこたえました。

「それでは、こゆびのさきほどばかだとはおもわないか。」

と王さまはまたたずねました。

「おもわないよ。」

とマジステルじいさんはこたえて、靴のかかとをうちつけました。

「もしおまえが、王さまはこゆびのさきほどばかだといったら、わしはこれをやるよ。だれもほかにきいてやしないから、だいじょうぶだよ。」

と王さまは、金の時計をポケットから出して、じいさんのひざにのせました。

「この国の王さまがばかだといえればこれをくれるのかい。」

とじいさんは金づちをもった手をわきにたれて、ひざの上の時計をみました。

「うん、小さい声で、ほんのひとくちいえばあげるよ。」

と王さまは手をもみあわせながらいいました。

するとじいさんは、やにわにその時計をひつつか

で床のうえにたたきつけました。

「さっさと出てうせろ。ぐずぐずしてるとぶちころし

てしまうぞ。不忠者めが。この国の王さまほどごりっぱなおかたが、世界中にまたとあるかッ。」

そして、もっていた金づちをふりあげました。

王さまは靴屋の店からとびだしました。とびだすとき、ひおいの棒にごつんと頭をぶつけて、大きなこぶ

をつくりました。

けれど王さまは、「こころを花のようにあかるくして、
「わしの人民はよい人民だ。わしの人民はよい人民
だ。」

とくりかえしながら、みやどのほうへかえってゆきま
した。

「王さまと靴屋」

※『新装版 新美南吉童話集 1
ごん狐』(2012年12月1日、大
日本図書株式会社)の「王さま
と靴屋」をもとに一部、漢字表
示とルビを編集しました。